

JSPCCS-JCC Joint Session

JSPCCS-JCC Joint Session

成人期の川崎病—動脈瘤と石灰化病変への対策—

座長:

濱岡 建城 (京都府立医科大学)

中村 正人 (東邦大学医療センター大橋病院)

Fri. Jul 17, 2015 4:40 PM - 6:10 PM 第3会場 (1F ペガサス C)

JJS-01~JJS-04

所属正式名称: 濱岡建城(京都府立医科大学大学院医学研究科 小児循環器・腎臓学)、中村正人(東邦大学医療センター大橋病院 循環器内科)

[JJS-03]川崎病成人例に対する冠動脈バイパス術

○丸山 雄二, 落 雅美, 白川 真, 佐々木 孝, 大森 裕也, 坂本 俊一郎, 宮城 泰雄, 石井 庸介, 師田 哲郎, 新田 隆 (日本医科大学 心臓血管外科)

Keywords:川崎病, 冠動脈バイパス術, 内胸動脈

【背景】川崎病成人例における冠血行再建術の適応は明らかでない。川崎病発症後5年以上が経過した冠動脈瘤は高度石灰化を伴うことが知られており、一般的な PCI のテクニックは適用されずロータブレードを用いた治療が中心となる。また低左心機能例、多枝病変、入口部病変、病変長が長い場合などは原則的に PCI 適応外であるため、CABG が担う役割は大きい。【目的】川崎病冠動脈疾患における冠血行再建術は、長期開存性が証明されている ITA の使用が大原則である。当院では、(1) ITA を LAD に吻合する、(2) 可及的に両側 ITA を使用する、(3) 静脈グラフトを使用しない、以上の方針に従っている。当院における治療方針の妥当性を検討した。【対象と方法】1991 年から 2014 年までに川崎病の既往を有する 41 症例に対して CABG を施行したが、20 歳以上の成人 7 症例について検討した。手術時年齢は 20-37 歳 (平均 29.3 ± 5.3 歳)。LMT 病変の 1 例を除いた 6 例すべてが CTO 病変 (LAD : 5 例、RCA : 5 例) であり、4 例に LCx の狭窄病変を認めた。2 例に LAD に対するローターブレードが施行されていた (1 例は開存、1 例は再狭窄)。平均吻合枝数は 2.4 ± 0.5 枝。使用グラフトは、LITA : 6、RITA : 7、GEA : 1、SV : 0 であり、LAD に病変を認めなかった 1 例で LITA を温存、RITA は 3 例においてフリーグラフトとして使用した。【結果】手術死亡なし。術後観察期間 4 年~21 年 (平均 10.0 ± 5.4 年) において遠隔期死亡、心事故ともなく、全症例が NYHA : I で経過している。すべてのグラフト開存を確認している。【結語】川崎病若年成人に対して動脈グラフトのみを使用した CABG を施行し良好な結果を得た。若年成人における川崎病冠動脈病変は CTO 病変が多く PCI が困難な症例も多い。LITA-LAD grafting を中心とした両側 ITA を用いた血行再建が重要である。